

『女誠扇綺譚』における台湾女性像

国立台湾大学 大学院生

謝 蓓 儀

一九二〇年の夏、二十九歳の日本作家、佐藤春夫は六月末から十月上旬にかけて、三か月に渡る「植民地の旅」に出た。中国の福建省を含む異郷の植民地台湾へ初旅したことを機に、佐藤は十数篇の小説、紀行文、随筆、詩などを書き下ろした。台湾と関わった作品の中で漢民族を中心に作ったものは多元的である。それらの作品の中で一際目立っているのが、『女誠扇綺譚』である。春夫は植民地台湾の旧首都台南の頹廢な城址と町を描写して、昔の台南の姿を目の前に映るようにさせる。台南での境遇と一つの奇譚を物語する。この旅で、「私」である記者は親友の世外民のお伴にして、台南を観光して、昔の首都としての赤嵌城址を見回すと、町の隅々から頹廢する雰囲気を感じ、少し惜しい気持ちを感じた。

世外民と一緒に町で遊覧した時、ある豪壯な廢屋を見つけた。春夫は廢屋に興味深く思っ、入って見た。その後、戦慄なストーリーを展開させていくのである。廢屋に初めて入った時、ある女の声聞こえた。人が住んでいる家だと思つた春夫と世外民は家に離れて、外にいる一人の老婆に話をかけた。老婆の口を通して、廢屋と沈家との歴史がわかつた。その女の声は幽霊の声だと信ずる世外民と合理主義を持つ「私」、二人の個性的な違いがはっきり見える。もう一度その声を確認したい「私」は世外民を誘つて、廢屋に戻つた。その廢屋の二階で「女誠扇」を発見して、その扇と結びついている二人の女の姿を想像して、ストーリーが展開していく。一人は荒廢した家で愛のために大胆に男と密会して、許されない恋をする女、もう一人は親の信条を守つて発狂してなお婚約者を一途に待ち続けて死んだ沈家の娘である。他人の目線をも気にせず、愛しい人と会つて、禁忌の恋をして、「自由恋愛」という点をはっきり表している女と「女誠扇」の道徳を守ろうとする沈家の娘、二人の一生が「女誠扇」を通して結びついた。二人の違う人生を「扇」という小道具で引き出した。「女誠扇」は沈の娘にとって親の訓誡と婚姻の信条であるが、習俗に抗して愛欲に溺れる奔放無智な娘が手にする時には、書かれた婦徳は会得されず、恋人を扇ぐ愛情表現の道具に転じる。

作品の結末に、女子の自殺によって、民族主義の感情を繊細的に取れた春夫は、同僚と違う視点からこの事件を見る。此の事件を通して、台湾民族主義の色彩を一層に添えるとも言えよう。本稿には、二人の女性はそれぞれの育てられた環境に影響されて、自分の意志による動きを通して、台湾女性のどんなイメージを読者に伝えようとするのかを探求したい。